

心地仕候キ、仲綱頓首謹言ト書タリケリ、遠城樂トハ、蛇ヲ取舞スナレバ、角問答有ケルコソ○下

〔吾妻鏡十七〕建仁三年六月一日丁酉、將軍家源家著御伊豆與狩倉、而號伊東崎之山、中有大洞、不知

其源遠、將軍恠之、已刻遣和田平太胤長、被見之、胤長舉火入彼穴、酉刻歸參申云、此穴行程數十里、暗

兮不見日光、有一大蛇擬吞胤長之間、拔劔斬殺訖云云、

〔古今著聞集二十〕建保の比、北小路堀川邊の在家に女有けり、湯をわかつて釜のまへに、火を

たきて居たりけるに、三尺計成蛇來、其かまのまへなるねずみの穴へ入にけり、女おそろしく思

ひて、いかゞせましと思たる所に、隣なる女○中何かおそれ給ふいとやすく去た、めてん、其湯

のにえたるを穴のくちにくみ入たまへ、さらばあつさにたへずしてはひ出なんと云、まことに

とていふまゝ、にかへりたる湯を、穴の口にくみ入たりける程に、あんにたがはず蛇出て、びりび

りとひろめきてやがて死ぬ、かしこくをしへてん、さんなれ共いかゞはせんとしてすて、げり、其

次日の未の時計に、其湯くみ入よとをしへつる女、俄に病出て、あらあつやく○中とおめきいりく

るめく事おびた○中し、○中やがてとりころしてげり、○中

後堀川院御位の時、所下人末重、丹波國桑原の御厨供御備進のためにくだりける時、くだんのみ

くりやに山あり、○中或山ぶしの有ける一人同道して行たりけるに、伴の山には、○中やをといふ蛇

あり、長さ二丈あまり計也、かまくびをたて、此二人の輩にかゝりて、大口をあきてのまんと去

けり、○中山ぶしはうち刀をぬきてむかふ、此時くちなはえよらで去、かまたりけり、○下

〔吾妻鏡三十二〕嘉禎四年六月廿五日戊辰、雨降終日不休、丑刻大風霹靂洪水、人屋多破損、梅尾、清瀧

河邊蛇出云云、

〔古今著聞集二十〕渡邊に往年の堂あり、藥師堂とぞいふなる、源三左衛門かけるが先祖の氏